

自然が変化して
飼育がしづらくなる
巣箱の前では
蜂と同じ気持ちに…
私も自然の一部ですから



尾形 玲子 さん

千葉県館山市
ひふみ養蜂園株式会社 代表取締役

人類が初めて口にした食べ物に蜂蜜といわれる。しかも蜂蜜は、神が授けた最も神聖な黄金色に由来する。養蜂は花蜜を採集するため危険を冒しながら、花を追って移動する重労働。日本でも数少ない女性養蜂家である。





P19: 蜂が活発に動き出す春は玲子さんにも特別な季節
P20: 植物や動物に生命力を与える自然の持つ大きな春の力は「すごい」とブログにつづる(右上と左)
蜜を採る花により蜂蜜の色や香りは異なる(右下2枚)

蜂の世界はキラキラ女子力

満開の菜の花のそばに置かれたいくつもの蜂の巣箱。その一つに近づき、蜂の動きを抑えるための煙を吹きかけながらそつとふたを開ける。箱の中に垂直に掛けてある巢板を一枚ずつ持ち上げ、蜂の数や動き、蜜の状態をチェックしていく。蜂がびっしりと張り付いた板もある。「これはいい状態。養蜂家にとってたまらない瞬間です」と女性養蜂家、尾形玲子さん(五六歳)はほほ笑む。よく見ると菜の花だけでなくビワの木も植わっている。このビワも蜂たちにとっての蜜源となる。秋口から冬にかけて咲く白い花の蜜を蜂たちは集める。玲子さんはこれを採蜜して希少な「ビワ蜜」として商品化している。

一つの巣箱にいる約二万匹の蜂は、一匹の女王蜂、雄蜂、働き蜂の三種類からなる。雄蜂と交尾した女王蜂はひたすら卵を産む。かえった蜂はほとんど働き蜂となり、花の蜜をせっせと集めては蜂蜜を作ったり、外からの攻撃に対し針で巣を守る。働き蜂は全て雌。「蜂の世界はキラキラ女子力で成り立っていますよ」と玲子さん。

養蜂家が採蜜するには、蜜を吹く花が豊作であることや蜂が元気に動ける適温の日が続くことなど、大半は自然環境に委ねるしかない。その中で養蜂家にできることは、働き蜂が元気に蜜を集められるように蜜をたくさん吹く花の近くに巣箱を置いたり、

女王蜂が産卵しやすい環境を作るために巣箱を小まめに観察し、巢板が働き蜂でいっぱいになれば巢板を追加したり、巣箱を二段重ねにしたりすること。

「巣箱もこちらが置きたいところに置くものじゃないんですよ。地主さんとしてしっかりした信頼関係を築いているかどうかに尽きます」と玲子さん。ひふみ養蜂園は現在四〇〇もの巣箱を、館山市と南房総市内の二〇カ所に置いている。「父のおかげで、蜂にとっていい場所に置かせてもらっている。本当に感謝しています」と亡くなった父、一二三多作さんに思いをはせる。

子育てしながら養蜂の世界

そんな玲子さんも仕事を始めた頃は「渋々でした」と打ち明ける。多作さんが故郷の青森県で養蜂を始めたのは戦後間もなく。寒さに弱い蜂のために東北地方の養蜂家は冬になると、温暖な千葉県に巣箱を移して越冬させる。そして春になると花の開花と共に北上していく。小学校入学まで玲子さんも両親について移動養蜂の旅に出ていた。「トチの蜜やローヤルゼリーを採るために、初夏は十和田市の電気もガスもない山の中のテント生活。子どもだからそれが当たり前だと思っていましたね(笑)」

専門学校を卒業し、館山市にある直売所で蜂蜜販売に専念していたが、多作さんが体調を崩すと、二人姉妹の長女である玲子さんは養蜂の仕事にも携わるようになった。



折しも、二人目の子どもの出産直後で、「育児や家事と養蜂の掛け持ちで新聞を読む暇もなかった。世界で一番働いている気分でした」。それでも続けてこられたのは、「子どもも蜂も生き物だから放っておけなかったし、学生時代にバスケットボールで鍛えた体力のおかげかな」

多作さんが過去に男性スタッフを雇ったこともあったが、なかなか長続きしなかった。「巣箱を置いて蜂蜜を採るイメージが強い養蜂業ですが、実は、きつい、きついと何度も言いたいほど、体力勝負の仕事です」と玲子さんは言う。

年間の主な仕事を聞いてみると、なるほど納得がいく。花が咲く春には女王蜂を産卵させるための管理、世話で追われる。「一年間の成績を左右する仕事なので最も緊張する時期」と玲子さん。一方で、花粉交配が必要な果菜類や果物を作る農家に蜂を貸す仕事も始まる。蜂の働き次第で作物の品質が決まるため、ベストな状態で貸し出す調整作業が欠かせない。

六月頃、玲子さんはアカシアの花を求めて秋田県に蜂を移動させる。夏になればスズメ蜂対策に追われる。スズメ蜂は蜜蜂も蜜も幼虫も食べてしまう天敵だという。秋から冬は産卵のペースが落ちるため、通常の養蜂家は蜂を休ませながら越冬させるが、玲子さんはビワ蜜を採るために、秋口に入ってから産卵させる仕事が続く。一年を通じて休む間はない。そして、「どんなに



蜂蜜を活かしたドレッシング、ぼん酢、ジュースなど数々の商品を開発 (上)
玲子さんの趣味は歌。「全てを忘れる瞬間が最高です」 (下)

経験を積んでも蜂に刺されます」

人間も自然の一部を実感

「家業を廃れさせるわけにいかない」との義務感から継いだ養蜂業だったが、いつしか蜂だけが持つ高い能力、けなげに働く蜂たちに玲子さんは「尊敬の念すら抱くようになった」と言う。

蜂が採ってきた蜜はその時点では蜂蜜ではなく、水分の多い花蜜。蜂から蜂へと口移しで運ばれ、胃袋を何度も通るうちに体内の酵素の働きにより、人間が決して作り出せない栄養価の高い蜂蜜になる。一匹の蜂が生涯を懸けて集める蜜はわずかスプーン

一杯分。この話を聞いた後、菜の花畑で巣板に溜まった蜂蜜を指ですくって食べさせてもらったが、この時ほど蜂に感謝したことはなく、そして生涯最高の味だった。

蜂の大量失踪現象「蜂群崩壊症候群(CCD)」が世界的に発生していることが知られ、改めて蜜蜂が注目されるようになった。

玲子さんも環境の変化により、年々飼育がしづらくなっていると痛感している。それでもひとたび巣箱に向かえば、「蜂がどうして欲しいかだけを考えて、私自身も蜂になって仕事をします。一体となってみると、私たち人間も自然の一部なんだと感ずるのです」

今もほぼ一日中、屋外で蜂の世話をする玲子さん。巣箱が置いてあるのは人里離れた場所ばかり。「いるのは蜂と私とイノシシだけなんて場所もありますが、全く気にならない」と生き生きとした表情で語る。

「損得を考えず養蜂に情熱を注いだ」という多作さんの夢が千葉県特産のビワの蜂蜜を採ることだった。それを四、五年前に玲子さんが苦勞の末に実現させた。そして「もうひと花咲かせたい」と六次産業化に取り組む。

四月一日、直売所の横に日本公庫から融資を受け、「蜂の駅」をオープンした。採蜜をしたり、ビワ蜜を原料とした加工品づくり、それらが食べられるイートインコーナー、蜜ろうやキャンドルづくりの体験工房も併設。「地元の良い素材と蜂蜜を組み合わせ、体にいい商品を届けていきたい」